

心は大空を泳ぐ

小川未明

青空文庫

いまごろ、みんなは、たのしく話をしながらか、先生につれられて、知らない道を歩いているだろうと思つと、勇吉は自分から進んで、いきたくないといふと、こんどの遠足にくわわらなかつたことが、なんとなく残念なような気がしました。

しかし、家のようすがわかつているので、このうえ、父や母に心配をかけたくなかつたのでした。

「おまえがいききたいなら、お父さんは、なんともして、つづこうをつけてやるから。」と、父はいいました。けれど、彼は、頭を強く横にふりました。

そのとき、これを見た母は、なんと感じたか、目に涙をためて

いました。

緑みどりいろ色のおおぞら大空を、二羽わのつばめが、気きままにとびまわって

いました。それを見ていた勇吉ゆうきちは、

「ぼく、つばめになりたいなあ。そうしたら、すぐ、みんなのところへ、いけるのになあ。」と、ひとりごとをしました。

たちまち、目めに、工場こうばや、製せいぞうば造場のある、にぎやかな町まちが見

え、また船ふねの出でたり、入はいったりする港みなとがうかんできて、見るみもの、

聞きくもの、すべてこれまで、知しらなかつたことばかりでした。ち

ようど、みんなは、大おおきな工場こうばを見学けんがくして、いま、その門もんから

出でたところで、先せんせい生せいのお話はなしを聞ききながら、港みなとのほうへ、歩あるいて

いたのでした。そして、一同どうのたのしそうな姿すがたが、ありありと、

想像そうぞうされるのでした。

すると、つぎには、紫むらさき色いろの水平線すいへいせんのもり上あがる海うみが見みえ
ました。どこか他国たこくの港みなとから、たくさんの貨物かもつをつんできたので
あろうか、汽笛きてきをならして、入はいつてきた船ふねがあります。だんだん、
その黒くろい大おおきな船ふねが近ちかづくくと、日ひの丸まるの旗はたが、風かぜにひらひらとひ
らめいて、目めにしみるのでした。

「万歳ばんざい……。」と、申もうし合あわせたごとく、みんなのさけぶ声こえが、
勇吉ゆうきちの耳みみに聞きこえたのです。しばらく、彼かれは、うつとりとして
いました。やがて、想像そうぞうの夢ゆめからさめると、つばめもどこへか
飛とび去さつて、いませんでした。じつとして、家いえにいられなかつた
ので、だれか友ともだちがいないものかと、学がっこう校のそばまで、走はしつ

ていきました。

べつに、自分の知ったものとも、あいませんでした。ただ、広い運動場に、こいのぼりが立って、高いさおのいただきに、赤と黒の二匹のこいが、生きてるように、大空を泳いでいました。彼はしばらく、その下に、たたずんで見上げているうち、自分がその黒い一匹きのこいに、なったような気がしたので、若葉のけむるような林を、波だて、ふいてきた風が、

「さあ、はやく、いっしょにいこうよ。」と、黒いほうの大きなこいを、さそうのでした。

「どこへ、つれていつてくれる。」と、こいが聞きました。

「君のいきたいところへ、どこへでも、つれていくよ。」と、風

はいいました。

「あの雲くもの上うえまで、つれていつてくれる。」と、こいは聞きまし
た。

「いいとも、雲くもの上うえにのれば、それは楽らくなものさ。それに、海うみの上うえでも、山やまの上うえでも、世界せかいじゆうを見みてあるくことが、できるもの。」と、風かぜは、いいました。

「ほんとうかい。はやく、ぼくをつれていつておくれ。」と、こいになった勇吉ゆうきちが、たのみました。

「いま、その綱つなを切きるからね。」と、風かぜはさげんで、こいのからだを、はりさけそうに、ふくらまして、力ちからいっぱい、吹ふいて、吹ふいて、吹ふきとばそうとしました。けれど、太ふとい綱つなを切きることがで

きなかつたのです。そのうち、風は力がつきてしまい、いつしか、ひっそりとして、二匹ひきのこいも元氣げんきなく、だらりと、さおの先さきにたれさがりました。勇吉ゆうきちは、家いえを思おもい出だして、かえっていきました。

真夜中まよなかのことでした。ふと耳みみをすますと、雨風あめかぜがつのつていました。

「学校がっこうのこいのぼりは、どうなつたらう。」と、勇吉ゆうきちは、とび起おきました。

「小使こづかいさんが、おろしなさつたでしょう。」と、おかあさんが、いわれたので、勇吉ゆうきちは安心あんしんして、また床とこにはいつて眠ねむりました。

た。

朝あさになると、太陽たいようはかがやいて、まったく昨夜ゆうべのあらしをわすれたような、うららかなお天気てんきでした。彼かれは、顔かおをあらうと、ねんのため、こいのぼりはどうなつたらうと、いそいで学がっ校こうまでいってみました。

しかし、小使こづかいさんが、わすれたのか、こいのぼりは一ひと晩ばんじゆう、雨あめ風かぜにさらされたとみえます。そして、半はん分ぶんぬれながらも、あらしに負まけず、元げん氣きでした。大おおきな口くちをあけ腹はらいっぱい風かぜをすつて、大おお空ぞらを泳およいでいました。

「そうだ、ぼくも、あらしなんかまに負まけず、元げん氣きよくやるぞ！」と、勇ゆう吉きちは、自じ分ぶんと思おもつた黒くろいこいにむかつて、拍はく手しゆをおく

りました。

おおぞら
大空で、

ぎんいろ
銀色の雲が、

した
下を見て、

わらって
いました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

※表題は底本では、「心《こころ》は大空《おおぞら》を泳《およぶ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

心は大空を泳ぐ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>